

1



0055766-000

特241-206

斯く国際スパイは暗躍する

大川惣一・著

トップ・ニュース社

昭和13

AJB

この著作物は、著作権者不明のため、著作第67条の規定に基づき、平成12年3月
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

特241
206

惣一著

38
2

たれさイパス”
日本外交官
国際スパイは
暗躍する



目次

捕はれたスパイの恐るべき告白……………(三)

スパイ學校は何を教へる……………(五)

世界に暗躍する國際スパイ……………(七)

1 私はスパイなの……………(八)

2 ふかしてゐた葉卷の中に……………(一〇)

3 戦地からの封筒がいゝ値段で……………(一二)

4 泥酔ひの親方……………(一九)

5 スパイされた日本外交官……………(二九)



特 241
206

捕はれたスパイの恐るべき告白

昭和十三年三月二日の都下の各新聞は一齊に帝都を初め全國の主要都市に巧妙な組織を張りめぐらし、暗躍する國際スパイを報導してゐた。

去年の事變勃發前迄の國際スパイの活躍中心舞臺はスペインのマドリッドを中心とするロンドン、パリ、ベルリンをルートとするものであつた。だが支那事變はスパイの活躍舞臺を一變せしめた。

——西歐より極東へ——今や實に國際スパイの檣舞臺は上海を起點とする北京、東京間に一變せしめてゐる。觀光客に化けたスパイ、親日家の假面をかぶつて潜入する國際スパイ、ブルジョアの社交機關の中に入つて平然と日本の重要機密を嗅ぎだしてゐる者等實に、夥しい數にのぼつてゐるのである。

しかもこれ等國際スパイは逮捕されながら臆面もなくうそぶくのである。

「日本人は個人的に接したり、賓客としてディナーやパーティに招待しておく、實に赤裸々に國家の實情や偽らざる意見を吐露する、この點日本くらの政府當局が何を考へ、何を計畫し、如何なる決意、實力を持つてゐるかを容易に探知出来る國はない、未だに日本人が外國崇拜の事大思想から脱却せず外人の前に出ると魔術的告白をする自屈な社交的儀禮に得々としてゐる慣習から來る場合が多い」と。

この一言を聞いては吾等日本人たるもの大いに考へる必要がある。恐るべき國際スパイは到る處に巧妙な網を張つてゐる、だが恐るべきはそのスパイにスパイされるといふ吾等日本人の心にあるのではあるまいか。大陸的な襟度、優秀民族としての、一等國としての抱擁力は勿論必要であるが、スパイに乗ぜられるような隙があつてはいけない。

處でこの國際スパイといふ奴はどんな方法で活躍してゐるのであるか？

一つや二つの決まつた手段でないことは勿論のこと、千變萬化、機に臨み變に應じ、神出鬼没、全く豫測することを許さないといふのがほんとうのことであらうが、それでもスパイの

國籍によつて一定の型はあるものだ、A國やB國のスパイは精巧な機具を使用し、よく社交場に入り出すとか、C國人は全國に多數在留してゐる同國人を使用したり半島人を使ふとか、R國人は主として共産主義者を利用するとか、一定の型を發見する事は出來ると云はれてゐる。だがこれは専門家の分類した抽象的な分類だ、ほんとうのスパイの活躍はそんなものでわかるものではない。吾等はスパイが如何に活躍するかを具體的に知る必要がある。次にドイツのフィッシュボンド街にあるシユラグ・ミューラー女史のスパイ學校でどんなことを教へてゐるかを紹介しよう。

スパイ學校は何を教へる

フィッシュボンド街十番地は通稱「化物屋敷」と云はれてゐる、それが彼の有名なシユラグ・ミューラー女史のスパイ學校である、此處では一體どんなことが教へられるのであらうか？スパイはどうして活躍するかを知るには最も好都合な研究對象である。

このスパイ學校には各國の軍服、徽章、大砲、彈藥、飛行機、要塞、軍艦、運送船、潜水艦、火藥等の實物、模型表が所狭いまでに並べられてゐる。そしてその部屋に入れられたが最後、スパイ術を習得するまでは一步も外には出されない。

そして指導者は教へるのだ。軍事上の情報教育や、諜報との秘密通信に関する凡ゆる戦術等、そして此處で教へられたスパイは次の事が絶対の戒律になつてゐる。

一、情報にこだわり、關心を抱いてゐる態度をみせるな、——急いではいけない

二、言葉を慎め、自國語は絶対に喋るな

三、奇妙な行動、談話は出来るだけ避けよ、人に眼に付き安

四、情報は他愛ない言葉で記録せよ。

例へば十門の大砲を或る地點で見たらば晝食が一〇シリングであつたと云ふ様に、

五、密告者は退屈させ、出来るならば、夜一緒に單調な旅をせよ、退屈すれば嘘をつかず大まかになる。思はぬ情報も従つて得られる。

- 六、文書、情報用紙を燒棄して安全と思ふな、顯微鏡は凡てを明かにする
- 七、何人にも心を許すな、反對スパイは絶対に感情に動かされぬ人達だ
- 八、所持品には常に細心であれ忘れるな
- 九、金の取扱及び金額に特に注意せよ
- 十、他人の姓名を借りる場合は用心せよ、小失策が身を誤る
- 十一、通報トリックは餘り獨創的であつてはならぬ

そしてこの檢査され有罪となつたスパイは必ずこの戒律のどれかを無視したものだと言はれてゐる。實にスパイたるも難き哉と云はねばならぬが同時に、かゝるスパイを發見するのも容易なわざではない。處が世の中は中々單純ではない。「妾はスパイで御座います」と云つて公然とスパイ行爲をやつてゐる者もあるのだ。

世界に暗躍する國際スパイ

次に述べるものは、ドイツの女スパイが、フランスの將校を相手に、成功していつた過程であるが以下各國の國際スパイが世界を股にかけて如何に活躍してゐるかを紹介することにしよ

(一) 私はスパイなの

「あなたのお口は軍隊のことを話す時がいちばん可愛いわ。あたしも軍隊の話が好きなの。變つてゐるでせう」

夜毎の軍隊の話、殊にヘレン・カンの興味の焦點となつたのはアルサス・ローレンを舞臺とする祕密裡に行なはれるタンク四萬臺を動員してのフランス機械兵團の演習らしい。

若しかしたら……いやあんな若い無邪氣な娘が——

中尉の胸にきれ〜に湧いた疑念は、いつか消へていつた。

だが、スパイ防止團員の眼は以前からヘレン・カンに注がれてゐた。

「私はバルヴェ中尉を愛してゐます。若し私に少しでもスパイらしい行動があつたとしたら、それをスパイらしく見せることによつて、中尉の興味をこの平凡な私に惹かせようとした私の罪なのです。疑はれるやうな行動があつたことは否定しません。が、それは私への愛をつなぐための一手段だつたのです」

勿論證據は一つもない、スパイ行動を全然否定するのではないが、防止團員も手の下しやうが無かつた。

「一體、私は誰かしら——ねえ、私が本當のことを打明けたら私を棄る？」

「いや、私は愛してゐる。云つてごらん」

「ぢやいふわ。私スパイなの。貴方の最も恐れる國の……私は何か得なければならぬ、が部長は女は駄目だ、依頼心が強いから、といふのよ」

「と、いふ意味は？」

「男のために自己の任務を忘れるから……私は笑ひ返したわ、莫迦々々しい。……がもう笑ひません。戀がどんなものか知つて了つては」

ヘレン・カンを抱いて、純情な中尉は、行手に裏切りの死が待つてゐる、かよわい乙女を救ひ庇護せねばならぬと決心するのだつた。

x x

處が、それから間もなくヘレン・カンは中尉の側に見へなくなつた。スパイの任務が終つたからだ。これは獨佛の國境ストラスブルグ市で起つた事件だ。

(二) ふかしてゐた葉卷の中に

ドイツとポーランドの國境近くの驛で一人の紳士が所持してゐた一通の電報の寫しで少女買業者の嫌疑でドイツの警官に捕まつた。

紳士はプレスラウの豪商で同地方の市會議員までやつてゐるれつきとした紳士で、紳士を連

行するドイツ警官を見送つたポーランドの移動警察官は笑つてゐた。

紳士は取調べられ乍ら平然と葉卷をふかしてゐた。そして少女買買のことに付いてはどんなに取問されても知らぬ、存ぜぬの一點張りであつた。その間、紳士は立て続けに五本六本と葉卷をふかし續けてゐた。

「おい、いゝかげんに止したまへ、部屋中が煙だらけじゃないか」

「いやどうも、だがこれは素敵なエヂプト卷なんだ、まあどうぞ一本」

紳士はポケットから一本のエヂプト葉卷を取出した。

叱言を言つた手前、すぐその葉卷に火をつけるわけにもいかず、葉卷をいぢりまわしてゐた。

そして何氣なしに警官が葉卷を破つたとたんに中から白い紙片が出て來た。

それを見た紳士はあわてゝポケットから別の一本を取出した。

「あ！ それはいけない。これと換へませう」

だが警官はニツと笑つたまま黙つてその手を押やつた。

その中には豫想してゐた少女賣買契約書のかはりに物騒な機密書——ドイツ陸軍軍用飛行機設計圖、發動機模型等——彼は恐るべきスパイであつた。葉巻の中にそんな密書があらうとは、

(三) 戦地からの封筒丈けがい、値段で

ウギーンのM街にあるゲルニアといふ質屋は寶石や貴金屬専門の一六銀行として全歐洲に有名である。勿論上流社會の貴族、實業家の婦人達の金融機關としてだ。

そのゲルニアの店先でさつきから、店員と押問答をやつてゐる一人の美しい婦人があつた。それはアルゲダ中佐夫人であつた。

「どうしても二千マーク要るんですけれど」

「奥様、これで私共はせい一ぱいの勉強で御座いますよ、……誠にお氣の毒様で御座いますけれど」

二人の前には素張らしい一個のダイヤ入の指輪があつた。

「だつてあなた、昨日今日の取引といふわけではなし……」

その時このゲルニアに一人の婦人が入つて來たので、話はそれで、とぎれてしまつた。

「すみませんが、この前を出して下さい」

「は、いらつしやいませ、毎度有難ふ御座います、……あの……眞珠の首飾で御座いましたですわね」

他の店員が應對した。

「じや三千五百マークだつたわね、利子はうんと取つて頂戴」

何だか馬鹿に景氣のよささうなこの新しく入つて來た婦人は金を渡すと、その首飾を無造作にハンドバックの中にねぢ込んで店を出て行つた。

アルゲダ中佐婦人はそれから又暫く問答を續けたらしかつたが、到當望が達せられなかつたとみへて悄然と店から出て行つた。そして彼女がまだ五六歩しか歩かない時後から聲がした。

「もし〜奥様」

振返つてみると、それは景氣のよささうなさつきの婦人である。

「何か御用ですか？」

彼女はこの女を見るとなんだかよけいに不愉快になつた。

「一寸お尋ね申しますが、あなた様も、御主人が戦線に出ていらつしやるのぢや御座いませんか？」

と面に親しげな微笑を浮べて問ひかけた。

「はア、さうですの」

「先程一寸お話を伺ひして、そうではないかと思ひましたの。私の主人もやつぱり……」

アルゲタ夫人は、まだ不快そうである。

「あの、甚だ失禮な申分ですけれど……」

と聲をひそめた。

「只今、私一萬マーク位ひだつたら遊んでゐる金が御座いますのですが、御用立て申してもよ

う御座いますの」

「えッ……？」

「いゝえ、お互に主人を戦線に送つておりますと、随分困ることが御座いますわ。又、何かの時に私がお助け願ふ事も御座いませう。お互様ですわ。よろしかつたら御遠慮なくお使ひ下さいました」

「まあ……でも」

x

x

それから數日後この二人の婦人はあるキャフェの奥まつたテーブルに席を占めてゐた。二人はもう五年も十年もの交際を續けてゐた友達の様である。

「お宅などは中佐様の事ですからもうおよろしう御座りませうけれど、私共などは何と云ひましてもまだ中尉でせう」眞珠の婦人の主人は中尉らしい。

「まア、奥さん、あんなこと仰しやつて。私、あなたの方がどれ程お羨しいか知れやしません

わ

「あら、奥さん。あんな事を仰しやつて。私主人のお金なんかじや、とてもやり切れやしませんのよ。實はあなたにも御紹介申上げようかと思つて居りましたのですが、とても、樂な好いお金儲けがありますの。戦地へ主人を送つてゐる將校の夫人には、こんな好い内職はないと思ひますわ」

アルゲダ夫人は一寸不安な氣がしたが、それでも思はず膝をのり出した。

「まア、どんな事でせう。教へて下さいません」

「ねえ、奥様、お宅にも戦線から御手紙が澤山参りますでせう？」

「ええ、参りますとも」

「その御主人からの御手紙の封筒がとていいお値段で賣れますのよ、五百マーク位ひに」

「まア、封筒だけで好いのですか？」

「ええ、勿論、手紙の中は人様に見せられませんわ、たゞ封筒だけでいいのですから、こんな

いい事はないと思ひますわ」

「どうしてそんなものが高いお金に賣れるのでせう？」

「それはかうなんですのよ。私あるお金持ちの知人がありますの。その方はずっと以前から切手のコレクションにこつてゐらつしやるんですが、最近では戦地から来る切手に夢中になつてゐらつしやるんですのよ。これはイギリスの切手だとか、フランスのだとか、とても夢中なの。それも新しく何聯隊の何部隊とよくわかつてゐるのがよけい、いいんですの」

「まア、奥さん是非宅の主人のも賣つて戴きたいと思ひますわ」

アルゲダ夫人はすっかり乘氣になつてしまつた。

それからアルゲダ中佐夫人はこの中尉夫人と稱する女を通じて戦地から来る夫の手紙を次から次へと賣つてしまつた。戦地からの夫の手紙が封筒だけ渡せば五百マークになるのだからたまらない。……不自由な留居を守るアルゲダ夫人は次第に彼女の虚榮心をも満足させることが出来るやうになつた。そして淋しく家を守る妻には戦地からの夫の通信が何よりの慰めだから、

毎日でも、お便りを書いて下さいと書き送った。

だが、彼女の贅澤品が増してくるに比例して戦地の夫たるアルゲダ中佐は苦戦を続けた。殆ど連戦連敗で、どうしてこんなに負けるのかわからなかつた。そして遂に夫人の許に送られる軍事郵便は、はたと途絶えてしまつた。

彼女の夫は遂に名譽の戦死をとげたのである。

x

x

手紙——切手には必ず發信地の消印があるのだ。その消印によつて、發信者の所屬する部隊の位置が明らかにされる。アルゲダ中佐の屬する部隊は夫人の賣つてゐた切手の消印によつて、敵諜報部へ密報されてゐたのだつた。

中佐の率ゐる部隊が苦戦を続け、全く連戦連敗だつた原因は夫人の淺基な心にあつたのだ。

x

x

處で讀者諸君！——これを憤慨する前に自分の胸に手をあて、靜かに考へる必要はないか知ら。

手紙こそ賣らないけれど、外國人にこそ云はないけれど、公然と公衆の前で、出征してゐる自分の知人や自分の兄弟等の動靜をおくめんもなく、べら／＼しゃべつたことはないだらうか？ そのほか、日本の軍事に関する機密を、さも得意げに、他人に話したことはないだらうか、スパイは何處にも居ると云はれてゐる。心すべきことではあるまいか。

(四) 泥酔ひの親方

マルセイユの埠頭内第十七號倉庫が大爆發を起してから數時間の後續いて停車場の石炭庫が何者かによつて爆破された。

この二つともその前日入荷したばかりのもので、この二つの爆破事件は只單なる爆發事件でなく、スパイの爲せるものであるといふことは、遺留された婦人帽の裝飾品であるバラの造花で明らかであつた。何故かならば、その造花の花弁に「R-113」といふ文字が記されてゐるのだ。勿論「R-113」といふのはスパイの符號である。

マルセーユ間諜本部が俄然活躍を初めたのは云ふまでもない。

X X

ビュポルトの海岸通りにカフェー・フランセーズといふ酒場がある、名前は優しいが、荒くれた船乗の歡樂境で、物凄い連中ばかりが集まる處だ。中からは聞きなれない唱がもれて来る。英語でもなければフランス語でもない。

その前で立止まつてゐる一人の男があつた。碁盤織の短い背廣服に古風な山高帽をかぶりマドロスパイプを斜にくはへたこの男はこの邊の波止場ごろつきの親分らしい。

「ふむ。ノルウエーの野郎共だな」

そうつぶやくと、扉の把手に手を掛けた。彼は二日前にノルウエーの貨物船が入港したのを知つてゐるらしい。

中は煙草の煙で濃霧のやうだ。この煙の中に亂ぎ狂つてゐる水夫達に一わたり眼をくれたこの親分風の男は或る一點にピタリと眼をすえた。其處には二十七八位ひの一人の温しさうな船

員が、この酒場には珍らしくも少しも酔つた様な風を見せず座つてゐる。その傍に一人の女が立つてゐる。別にその船員と語り合つてゐるのでもなく、通りがかりに此處を通つたと云ふ風情だが、その時船員の手から女に素早く一本の鉛筆が渡されたのであつた。——女は間もなく、目立たぬ様にその家を出て行つた。

親分風の男は目をつけた船員の側に腰を下した。

「亭主。アブサンをくんな」

小さなアブサンのグラスは、またたく間に二三杯乾された。少し赤くなつた眼で彼はちつと船員を見詰めて聲を掛けた。

「お前さん、ノルウエーだらう？」

「さうです」

「何だつて他の仲間が陽氣にやつてゐるのに、お前さんだけ獨りで黙りこんでゐるんだい」
「私はまだ新米なんですよ」

「ぢや相手がねえつてんだね、よし俺が相手になつてやらあ。おい、亭主、アブサンをもう二
〇」

「いゝえ、私は酒はまるきりいけないんで」

「何云つてるんだ。船乗で酒を呑まない奴があるかね」

「でも……」

「まア、いつて事よ」

そこにはこぼれたアブサンのグラスを無理に船員に持たした。

「ぢや、一杯だけ……」

「さうだ〜。お前さんの健康を祝ふぜ。景氣よく、ぐつとやつてくんねえ」

二人はグラスをコツンと合はせて、一息に乾した。

「よろ〜。美事々々。それみねえ。酒はまるきりとか何とかぬかしやがつて、その手並ぢや
相當なもんじやねえか。お、亭主。お代りだよ」

「いゝえ、もう全くほんとうに……」

「まア、好いつてことよ。俺と云ふものがついてゐるんだ。悪いやうにやしねえよ」

其時、もうお代りのグラスがテーブルの上のつてゐた。

「でも實際もう、駄目なんで」

「そ……そんな事を云はねえで、まあ呑んでくんなよ」

「ほんとうなんですよ。私はもう……」

「ぢや、お前は俺に恥をかゝせるつもりなのかい？」

「と、とんでもない。さう云ふ譯ぢや……」

「おう、此處を何處だと思つてるんだ」

親方はいきなり船員の胸倉を掴んだ。

「……何をします」

「うるせえいやい。立て〜」

親方はぐいと船員を引きづり起した。

「やい。野郎。なめやがつたな」

椅子が飛ぶ。グラスが飛ぶ。皆んな細立ちになつた。……そこを數多の警官が馳けつけてきたのである。

此處は警察の取調室である。

「だつて旦那。此の野郎。私が酒を奢らうつて云ふのに、どうしても呑まねえんでね。しやくにさわりますよ」

親方はしどろもどろで辯解したが警察でそんな話が通る筈はなかつた。

「此奴を留置所へ入れて置け！」

命令一下、彼は廊下に引出された。扉がびしやりと閉る。そうすると彼はもう酔つぱらいでなかつた。

「僕は間諜部の者だ。あの男の所持品を皆僕の所へ持つて来て見せてくれ給へ」

この親方は實はマルセーユ間諜部の有名なルドウ中尉の變装した姿だつたのだ。内ポケットから取出して見せた一札は、それを證明してゐた。

警官はあわてゝ元の部屋に戻り、泥酔の男は間諜部のルドウ中尉であること、ノウルエーの船員がスパイらしいことを警部の耳に、さゝやいた。

うなづいた警部はわざと全然別なことを云つた。

「え？ そんなに傷がひどいんだつて」

と警官に應待しておいてから、船員に向き直つた。

「君。あの男は胸にひどい傷を受けてゐるさうだが、君は何か兇器を持つてゐはしないかね？」

「いゝえ、何も持つてゐませんよ」

「一應君の身體検査をせんけりやいかん」

「さあ、どうぞ」

船員は悪びれた様子もなく、警官のなすがまゝにまかせた。船員手帳、ハンカチ、時計、一

通の封書、パイプ、煙草入、紙幣と銀貨、警官は注意深く船員の所持品を取出していった。それ等の品々がルドウ中尉の前にひろげられたのは云ふまでもない。

中尉は一つ／＼に鋭い注視を向け乍ら、細かく調べ始めた。

最後に彼の手に残されたのは封書である。彼は内容を調べる前に、左肩に貼られた切手をちつと見詰めた。切手と消印とがほんの少しではあつたが、ずつてゐるのだ。

「ふん」

彼の顔には微笑が浮んだ。

「君、急いで少し湯を持つて来てくれ給へ」

ルドウ中尉は切手を静かにぬらし始めた。切手は水気を吸ひ込んで、間もなくはがされたと、その下に二つの文字が記されてゐる。

(B—G)

彼は急いで手紙の内容を調べた。

文面は別に大したものではなかつた。綿々たる情緒で妻が夫に送る手紙が綴られてあつた。危険区域を航海しつゞけてゐる夫の身の上を案じた妻の心持が細々と涙ぐましく讀まれるのだつた。

ルドウ中尉はじつとそれを讀んでゐたが、すぐ警官に言つた。

「怪しい奴ですから、二三日留めておいて下さい。何か理由をつけてね」

x

x

ルドウ中尉はそれから間もなく自分の下宿へ歸つて、部屋に入ると、ピンと錠を下した。そして例の手紙を出すと、じつと考へ續けるのであつた。

(B—G)

此の二つの文字が總ての秘密を解く鍵に相違ない。アルファベットの順に數へると、Bは二番目で、Gは七番目である。彼は紙を取出して、連綿たる情緒の手紙の文字を、二番目、七番目と順々に拾ひ出して、紙に寫し取つてみたが、何等の意味をなさない。

「どうしたものかな」

更にしばらく考へてゐたが、今度は別な方法をとつた。最初に二字目の文字を全部拾ひ出し、後に七字目を拾ひ出して綴つてみた。

「あッ……！」

彼は思はず雀躍こぞりしないではゐられなかつた。どうだらう。その秘密文は次の如くに讀まれたのであつた。

「埠頭倉庫十一番十七番、棉花充滿せり。停車場の石炭庫と共に爆破せよ。十三日夜八時、ビユウポルト、フランセーズにて更にR—一三號に例の物を渡すべし」

此の秘密文によつて、十七番倉庫の爆破犯人に彼の怪しいノルウエーの船員が深い關係を持つてゐることは確實となつた。そうするとフランセーズのあの女が確たかにR—一三號だ。それは爆破された現場に遺留されたR—一三號のマークの記入されてゐる、婦人帽の裝飾品でも明確だ。

勿論ノルウエーの船員は警察の留置場からそのまま間諜部かんてぶへと送られた。所で問題のR—一三號は……？

その翌日ビユウポルトのフランセーズへ行つてみたが、其處には例の女はもう姿を見せなかつた。でもマルセーユの街は蟻の這出るすき間もない。嚴重な網はすぐ張りめぐらされた。

R—一三號がバルニス・ホテルで捕まつたのはその翌日であつた。彼女は獨逸の恐るべきスパイでマルーセユ間諜部で長い間たづね求めてゐた女であつたのだ。

パー・フランセーズで何氣なく渡された鉛筆は火藥庫を爆破する爲めの強烈な爆發力を有する爆弾だつたのである。

(五) スパイされた日本外交官

且つて日英秘密協定が結ばれた當時のこと、倫敦の盛場うきりやピカデリー・サーカスの萬國旅行會社の前に自動車を乗りつけた一人の日本人がゐた。それは公使館一等書記官溝口氏であつた。

「パリー行急行列車の席が空いてゐるかね」

「はい、三號車の百八十五と六の二つだけがまだ、ふさがつてゐません。席は餘りよくはありませんが」

その時、一人の女が、その話にしつと立耳をそばだてゝゐた。碧く澄んだ大きな眼、眞珠のやうな白く美しい齒並、波打つ金髪、實に素張らしい美人だ、このロンドンにもこんな美人は少いだらう。

ところでこの妖艶の美人は一體何の爲めにこの會話に立耳をそばだてゝゐたのであらうか？何も知らない溝口書記官は、その座席卷を買つて列車に乗込んだ。

列車が動き出すと同時に溝口氏は新聞を取出して外電の記事に読みふけつてゐた。

ブーンと素張らしい香水の香がした。

「御免遊ばせ」

實に優しい女の聲だ。見れば溝口氏にとつては初めてだが、さつきの女だ。何んて素的な女

だらう。——一寸胸のさわめくのを感じたが、再び新聞を取上げ、さりげなく読みつゞけてゐた。

列車はドーヴァ海峡へと進んでゐる。それまでに二時間はたつぷりかゝる。新聞を読み終へて、膝の上におくと、隣の美人は急になまめかしく微笑みかけて、

「もし新聞がおあきでしたら一寸拜見させて戴けませんでせうか？」

「さあ、どうぞ御ゆつくり」

それがきつかけで二人はいつの間にか打解けてゐつた。この美人はパリーまで行くのらしい、それはそうと何んて、魅惑的な女だらう、それにその媚びをふくだ態度、溝口氏の胸はあやしくもふるへた。でも重大使命を帯びてゐる溝口氏は心を引きしめてゐなければならなかつた。

海峡を渡ればフランス。カレーの停車場からパリーへ、その女はづゝと溝口氏と話づゝけてゐた。

「ではまた何時か、きつとお目にかゝれると思ひますわ」

「失禮しました、御機嫌よう」

x x

その翌朝早く、溝口氏はバリーの大使館を訪ねた。そして岩井子爵に今度の用件に付き報告した

處で溝口氏はどんな重大用件があるのか、——日英機密協定が承認されて東京の外務省から、ロンドンの大使に長文の暗號電報が来たのは昨日の朝である。併しこの機密協定はソヴェットには絶対にもらしてならないものであつた。併しソヴェットはこの秘密交渉を早くも感ずいたらしく『デーリー・メール』のモスクワ特電にはそれらしい報道があつた。

秘密の絶対性を確保する爲めには特使に携行させるといふような表立つ手續なんかによつてはいけない。五月十日神戸出帆の箱崎丸に嚴封の上託送した。同船は六月二十一日マルセイユに入港の豫定、その船に託送された秘密條文を船長より受取らねばならぬのが溝口氏の重大任務であつた。

x x

かうしてバリーに着いた溝口氏はすぐその晩マルセイユに直行しなければならなかつた。

問題の二十一日。箱崎丸は午前十一時マルセイユの第七號岸壁に横着けになつた。第一號金庫に納められてあつた、その重大條約正文は、溝口氏の手になつた。表を紅白のリボンで結んだ、この嚴封の正文は溝口氏の新らしスーツ・ケースの中に收められた。ピンと鍵がかけられた。

かうして溝口氏が箱崎丸のタラップを降りてきた時である。ニツコリとほゝゑみかける美しい眸を發見したのである。

「あらー」

「やあー」

それはバリーまで同じ列車に乗合せた例の美人だつた。

「まあ、あなたもこちらへ？」

美人は、いかにもびつくりしたやうに歩み寄つて来て、なにかと話しかけた。が、重大任務に溝口氏は緊張してゐた。

「急ぎますから、失禮します」

さういひ乗るなり、側のタクシーに乗つた。——大事なスーツ・ケースを抱へて。

後姿を見送つた例の美人は何時の間にか出てきた一人のユダヤ人らしい男と何やら囁いてゐた。

x

x

溝口氏はその翌る朝パリーのホテルよりロンドンの大使館に電報を打つた、例の書類を受領し二十三日二時歸る。迎の自動車をたのむ。ミゾグチ。

ノール停車場のプラウトフォームは混雑してゐた。汽笛が鳴つて汽車が動きだした時、見送りに来た書記生と別れの挨拶を交して、ヒョイと顔をあげるとおどろいた。人込みの中に例の美人が、ちつと自分を見つめてゐるではないか。

思へば不思議なこともあるものだ。俺の行先き先きにあの女はきてゐる、溝口氏は列車にゆられ乍ら考へたが、突然ブル／＼と身ぶるひした。條約文を狙ふスバイ？ だがもう大丈夫だ。條約正文はちやんと此處に持つてゐるし、あの女はこの列車に乗つてゐない。

x

x

ドーヴァー海峡の浪は高かつた。溝口氏がロンドンのヴィクトリア停車場に着いた時はクタク／＼になつてゐた。よろめく足を踏みしめて構内を出たが、大使館からの自動車はどこにも見當らなかつた。

「電報まで打つておいたのに」

いぶかりながらタクシーを拾はうとする時一臺の自動車が溝口氏の前に止まつた。

「溝口書記官で御座いますか？ 今日大使館の自動車は急用で、みな出拂つてゐますので私がお迎ひに上りました」
見なれない運転手であつた。

「あゝ、さうか」

溝口氏は、例の大事なスーツ・ケースを抱へて車に乗った。すぐ大使館に着く、もう安心だ、そう思ったとたんにくらくくとめまひがして、そのままクツションに倒れた。

「書記官、大使館に着きました」

呼び起されて、ハット気がつくくと、自分はいつの間にか、自動車の中で眠りこけてゐたのである。見れば、こゝはまさしく大使館の玄関先だ。さつきの運転手が恭しくドアを開けて、待つてゐる。

車から降りると又激しい目まひがした。スーツ・ケースをしつかり持つてふらくしながら館内に這入つて行くと溝口氏の姿を見た大使が「アツ」と驚ろいた。

「君、溝口君、どうしたんだ。さつき電報があつたから、けふは歸らないもんだと思つてゐたんだ。無理をしてはいかんな。ひどく顔色が悪い」

「え？ 電報ですつて？」

意外な大使の言葉である。だが打たない電報は正しくこの大使館宛に来てゐるのである。

「サクヤライ ハツネツ 一ニチオクレル オユルシコフ ミゾグチ」

あやしいと思つた溝口氏は大急ぎで大事なスーツ・ケースを鍵で開けた。その瞬間、大使と書記官は同時に

「アツ！」と鋭く叫んだ。

中に納まつてゐるのは一束の古新聞紙であつた。

大使の顔色はサツト變つた。

「君、こ、これは、一體どうしたんだ！」

「おゝ！」

溝口書記官はかう叫ぶとバツたり倒れてしまつた。

x

x

醫者の診察によると溝口氏は強烈な麻酔劑を嗅がされてゐた。間もなく意識を回復した溝口

氏は、ちつと記憶を呼び醒ましていつた。

「そうだ、やはりあの女はスパイだつたんだ。だが、だが、俺がマルセイユに行く用向を一體何處でしやべつたんだ」だがそれはあつた、それはほんとにたゞの一度だつたけれど、勿論例の怪美人ではない、同じ日本人である落合書記官にだ、言葉は日本語で、場所はロンドン郊外のゴルフファード、——人もない、丘の上、二人だけで日本語で話したのだ——どこへ洩れよう筈もないのだが、禍はその時踏み出されてゐた。傍にジミーと云ふ球拾ひが知らぬ顔をして、二人の話に全神経を集中してゐたのだ、そのジミーと云ふのは、つい一月程前ゴルフファードに雇入れられたのだつた。溝口氏がファードに來ると、きまつて他の球拾ひを押退けるやうにして溝口氏づきになる男であつた。いやに眼つきの鋭い、無愛想な男であつたが實に忠實であつた。

これは後でわかつた事だが、このジミーこそは國際スパイの錚々たる一人で、日本語にも十分に通じてゐたのである。

かくて、球拾ひジミーは、マルセイユ行の時間を探知する役をつとめた。そして例の怪美人は書記官の途中の行動を監視する尾行役で、溝口氏がパリをたつた時、怪しい男と話しをしてゐたのは一日延期の偽電を打つ爲めだつたのである。

この報をきいて英国外務省は警倒した。倫敦の警視廳は全機能をあげたが、遂ひに何の手がかりもなかつたのである。その結果、この秘密協約は普通の通商條約に改められてしまつた。肝腎の秘密協定は、この協定を目的とする某國に知れてしまつたからだ、——今頃例の怪美人はそれを眺めてさぞかしほくそ笑んでゐる事であらう。

◇編輯室より◇

戦争とスパイは不可分なものでしかも他の何物よりもスリルがある。新聞雑誌單行本映畫と、あらゆるものがこのスパイ物を取あげるのは當然の話だ。だがこのスパイ物はどんなに街に氾濫しても害毒を流さないそれどころか、何等かの意味に於て國家に裨益してゐるのである。世界大戦の前奏曲が東西に奏でられてゐるとき、國家にとつて最も肝腎なことは防諜精神の徹底にあるからだ。

×
トツブ・ニュース社では次の様な時局解説のパンフレットを發行してゐます。御希望の方は題名指定の上郵券十三錢同封でお申込下さい。すぐ御送附致します

- ◎大陸經濟開發を鮎川義介に訊く
- ◎各國スパイは日本でどう活躍してゐるか
- ◎急轉換せる列強の極東政策
- ◎斷絶後の蔣政權を軍部はどうする
- ◎大陸日本をリードする十人男
- ◎國家總動員法案の及ぼすところ
- ◎畑俊六と松井石根

斯く國際スパイは暗躍する

定價十錢(送料三錢)

昭和十三年四月廿五日印刷納本
昭和十三年四月一日發行

著者 大川惣一

發行人 西牟田重雄
東京市板橋區板橋六ノ三二五二

印刷所 大森印刷所
東京市小石川區指ヶ谷町一四六

發行所 トツブ・ニュース社
東京市板橋區板橋六ノ三二五二

東京鐵道局公認 鐵道保養會 (總店各埠本ム)
鐵道弘濟會新聞部
スタンド一手販賣

大取次
菊竹金文堂
大坪惇進堂・新正堂・富田報英堂
川頭春陽堂・大阪屋號・川瀬書店

禁煙節煙

貴方の思ひ通りになる

スモーク・ダウン

どんなに煙草の害毒を知つてゐてもこれだけは止められぬと思つてゐる方氣持の悪くなる程ふかすすぎても尙煙草を手にしなないと氣のすまぬ方スモーク・ダウンを一度用ひて御覧なさい貴方はキット成程と頷くでせう。近代化學の所産たるスモーク・ダウンは、禁煙節煙を貴方の意志通りにすることが出来ます

◎スモーク・ダウンは含ひ薬ですから副作用は絶対にありません。
◎御註文には禁煙用、節煙用と御明記して下さい。

たかゞバット一個だと思つてゐるも一年には
二十九圓二十錢を貴方は煙にしてゐるのです

定價一圓二十錢
送料 十 錢

電話大塚(86)二〇三八番
振替東京 六一四三番

教材社代理部

東京市小石川區
西丸町九番地